



遅ればせながら、新年おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお

願い申し上げます。

さて昨年は、真珠湾攻撃による日米開戦から80周年ということで、マスコミでさまざまな特集が組まれました。その中で、私が特に気になったのは、日本はなぜ、国力に

確かに「奇襲攻撃」と

いう形で先に仕掛けたのは日本だし、しかも大敗を喫したのだから、「勝てば官軍」の世界では、しよせん日本が悪かったということになり、極東

国際軍事法廷(東京裁判)で日本側の責任者は戦犯として処刑されました。しかし、国家間の戦争は、人間同士のけんかと

分析する余裕はないの

日本は米英に

はめられた!

日米開戦外交の裏側

同じく相手のある事であつて、一方がすべて善、他方がすべて悪ということとはまれで、双方に言い分があるのが普通です。

私が日本人だから日本の立場をことさら弁護する気はないし、東京裁判の判決自体を否定するつもりもありませんが、でき

るだけ公正かつ客観的に戦争の原因や責任問題を

考えてみることは必要だに、第二次世界大戦は非

常に複雑なグローバルな性格を持っていただけと考えられています。真珠湾攻撃以後直接戦つたのは主に日米でしたが、アジアではその10年ほど前から日中戦争が始まつており、それがいわゆる太平洋戦争(大東亜戦争)にエスカレートしていきました。またヨーロッパでは、日米開戦より一足先にヒトラーのナチス・ドイツのポーランド侵攻(19

39年9月)により戦争が始まっていました。ドイツは破竹の勢いで、ヨーロッパ大陸(ロシアを除く)を制覇し、島国の英国だけが必死に抵抗していたものの、ドイツの猛攻の前にギリギリまで追い詰められていました。そこで、英国のチャーチル首相は、親戚筋のアメリカのルーズベルト大統領に加勢を求めました。ドイツは、アメリカ



真珠湾攻撃で撃沈された米戦艦

だけに直接攻撃しないように慎重に対処していたので、いくらイギリスを助けたくても、ドイツとの戦いに直接割つて入ることはできない状況でした。元々アメリカには、建国以来の孤立主義(モンロー主義)の伝統があり、その上、第一次世界大戦(1914~18年)に参戦して多大の犠牲を払った経験があつたので、国民の間には厭戦ムードが浸透してしま

(2面に続く)

令和つれづれ草

金子熊夫

日独同盟が 間違いの第一歩

た。サイゴン（現在のホーチミン市）からは日本軍の爆撃機がシンガポールやインドネシアへ出撃

ところが、そこへ日本が、ドイツ、イタリアと組んで三国同盟（1940年9月）を締結するといふ出来事が起きます。日本は、無敵のドイツと組めば、国際政治で優位に立ち、アジアで勢力圏を拡大しやすくなると思

本は三国同盟締結と同時に仏領インドシナ（現在のベトナム）の北部に進駐し、1年後には南部仏印まで進出。フランス本國はすでにドイツに降伏していたので、日本軍はやすやすと進駐できまし



ヤルタ会談（1945年2月）のチャーチル、ルーズベルト、スターリン（左から）

民禁止などの排日措置に加えて、日本の在米資産凍結、石油禁輸などの経済制裁を強化し、ABC D（米英華蘭）包囲網を完成します（この辺は現在の対イラン制裁のやり方に非常によく似ています）。

「しめた、日本が わなにはまった！」

この時点で突然、米国のハル國務長官が日本軍の仏印と中国からの全面撤退を要求する覚書を突きつけ、中国からの撤退は、日露戦争以来日本が嘗々と築いてきた利権（満州を含む）を全部放棄することを意味し、日本にとっては到底受け入れられないこと。米國もそれを承知の上で強引に突き付けてきました。明らかに日本を挑発し、暴発させるためです。

今考えると、仏印と中国本土からは段階的に撤退し、満州は条件闘争に持ち込むという手もあったのではないかと思えますが、いずれにせよ、ハル・ノートを最後通牒と受け取った日本政府は、ついに堪忍袋の緒が切れ

ベルトとチャーチルで、ルーズベルトは、待つていましたとばかり、翌日議会で日本軍の「卑怯な奇襲攻撃」に対する仕返しという形で対日宣戦布告を宣言。一方のチャーチルは「真珠湾攻撃は神の救いだ。これで戦争に勝った」とその日の日記

に記しました。米國は日本政府や日本軍の暗号電報の解読に成功していたので、事前に知らなかったはずがありませんが、両人としては「日本がまんまとわなにはまった。しめた」と思ったことでしょう。

日米が開戦すれば三国同盟で自動的に米國は、日本の同盟国であるドイツとも敵対関係に入れるからです。言い換えると、日本は真珠湾で戦術的勝利を取ったものの、戦略的には大失敗を犯したという事です。

日本は米英に はめられた！



「ルーズベルト二与フル書」を書いた市丸海軍中將

チャーチルがつるんでいることはなんとなく感じていたことです。その証拠に、真珠湾攻撃当時まだ5歳の子供だった私たちがさえ、ルーズベルトとチャーチルには特別な憎悪と敵愾心を抱き、替え歌で「ルーズベルトのベ

元タクルズベルトは、思想的に共產主義に寛容で、スターリンとも良好な関係にありました。そのため彼は、日独との戦争が継続中から、チャーチル、スターリンと頻りに会って戦後の新しい国際政治システムについて協議していましたが、彼の頭の中には、米英ソ協

元タクルズベルトは、思想的に共產主義に寛容で、スターリンとも良好な関係にありました。そのため彼は、日独との戦争が継続中から、チャーチル、スターリンと頻りに会って戦後の新しい国際政治システムについて協議していましたが、彼の頭の中には、米英ソ協

元タクルズベルトは、思想的に共產主義に寛容で、スターリンとも良好な関係にありました。そのため彼は、日独との戦争が継続中から、チャーチル、スターリンと頻りに会って戦後の新しい国際政治システムについて協議していましたが、彼の頭の中には、米英ソ協

連憲章上で「旧敵国」とされており、これを修正し、日独を常任理事國に加わえようとしても、拒否権に阻まれて実現しません。（ちなみに、1970年の核兵器不拡散条約でも、五大國だけが核兵器の保有を公認されており、しかも条約改正には五大國の同意が必要なので、彼らが持つ核を廃絶させることは永久に不可能です）

歴史は皮肉なもので、日本と戦った蒋介石の中華人民共和國に敗れ、1972年に國連から追放。代わりに共産中國が代表権を認められ、安保理の常任理事國の地位を引き継ぎました。これについては当時のニクソン米大統領と策士のキッシンジャー補佐官（その後國務長官）の判断が決定的でしたが、今になってあの判断は間違っていない、中国を甘やかし過ぎたという意見がこの数年

政治をゆがんだものにして、最大の原因です。しかも、日独は未だに國

外交を展開して行かねばなりません。（この点で、昨年本欄に5回連載した拙稿は多少なりとも参考になると思っています）

どうも日本人は、昔から黒白をはっきりさせる潔さを尊ぶ国民性があり、外交をぬらりくらり、巧妙に立ち回るのが苦手というか、そうした対応をいざしむ性向があるように思えます。おそろしく古来の武士道精神などの影響で、現行憲法のナイーブな平和主義の影響もあるでしょう。

しかし、それは複雑怪奇な現在の国際政治環境の中では通用しません。誤解を招くことを覚悟で敢えて言えば、日本人はもって国際社会でスル賢く、巧妙に立ち回る術を身につけるべきでしょう。ルーズベルトやチャーチルのように中々行きませんが、彼らの爪

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元國連環境計画（UNEP）アジア太平洋地域代表、元東海大学教授、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、84歳。